中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第５巻(2019) 175－183

# 社会福祉士養成課程での教育と援助現場で必要となる実践力とのギャップに関する研究
## ― 通信課程の学生の入学から卒業、そして、卒業後のライフヒストリーを通して ―

打　保　由　佳[1)]

# Study About a Gap with Education by a Social Worker Education Course and the Practice Power Needed at an Aid Site: The Life Story through Graduation from Student's Entrance and After Graduation of the Correspondence Education Department

Yuka UTSUBO

本稿では、社会福祉士養成課程における、ソーシャルワークの理論に基づく実践力を習得するための教育内容に着目し、社会福祉士養成の大学（以下、養成校）の学生が感じる、養成校での教育と援助現場で求められる実践力とのギャップについて考察する。

これを検証するため、通信課程の養成校に入学、社会福祉士資格を取得後卒業し、その後、援助現場で活動しているＡさんを対象にライフヒストリー法に基づく聞き取り調査を実施した。そして、Ａさんのライフヒストリーを分析することで、養成校では理論に基づき形式に従った援助の展開を学ぶのに対して、援助現場ではかかわる人びとの反応によって、柔軟に形を変えながら対応していかなければならず、学生は、その違いによって戸惑いを感じることが明らかになった。

以上のような研究結果をふまえ、今後、養成校での教育内容を検討するための新たな課題が提示できた。

**キーワード**：社会福祉士養成課程、理論に基づく実践力、利用者本位、個別性、ライフヒストリー

## はじめに

社会福祉士養成教育は、2009（平成21）年の社会福祉士養成課程の教育カリキュラム改定によって、ソーシャルワークの理論に基づく実践力を重視する方向に向かい、援助現場を含めた相談援助実習（以下、実習）・相談援助実習指導[1]の体制整備がはじまった。

更には、「ニッポン一億総活躍プラン」に関連する福祉人材確保対策検討会での議論の中で、社会福祉士としての役割を明確にすると共に、実践力の強化について提言された。そして、「専門性の高い社会福祉士の養成として、より一層多様化・複雑化する地域課題に対応できる社会福祉士の養成に向け、養成施設・大学等と職能団体の連携による実践を重視した教育内容の充実について、さらなる検討を進め確立していく」（厚生労働省ホームページ，2016, pp.5）ことが目標として掲げられた。

また、2021年には、新たな教育カリキュラムの導入が予定されている。そして、導入に向けて2019年６月に厚生労働省から教育カリキュラム（案）が提示され、今後より一層の理論に基づく実践力の強化を行うことが示された。

しかし、現在の社会福祉士養成課程の教育カリキュラムでは、ソーシャルワークに関する理論と援助現場における実践との間に距離のあることが課題

１）人間福祉学部人間福祉学科

としてある。なぜなら、ソーシャルワークは、生活で発生する多様な困難や利用者個人のみならず、その他関係者の価値観を含む複雑な要素が絡まり合う家族や集団、地域などを対象にしていること、援助関係のもとで利用者を中心とした「利用者本位」の視点で支援を行うことから、利用者の多様な生き方や価値観などの「個別性」にふれることによって援助活動のあり方が左右されるからである。

そこで本稿では、養成校の学生が感じる、養成校での教育と援助現場で求められる実践力とのギャップとそれが生じる要因について、聞き取り調査の結果から考察する。

## １．方　法

### （１）聞き取り調査の手法

本研究では、調査手法として、ライフヒストリー法を用いる。ライフヒストリー法は、主に社会学、心理学、文化人類学、歴史学等の分野で研究され、参与観察や聞き取り調査の手法として発展してきた。この手法は、個人に焦点をあて、個人が、自身のライフ（人生、生涯、生活、生き方等）での経験について語った事柄を時間軸に沿って整理した上で、自己の語りに影響を与えている社会（制度や文化等）との相互性をふまえ、個人の主観的な世界を社会的な側面を含め総合的に描き出そうとする質的調査法の一つである。つまり、ライフヒストリー法は、自己の発達や主観的意味に接近する方法としてだけでなく、周辺環境との関連性を明らかにする方法ともいえるのである。

### （２）聞き取り調査の対象

聞き取り調査の対象は、養成校の通信課程に2013年度から三年次に編入学し、2014年度までの２年間在籍した卒業生のＡさんとする。Ａさんとは、養成校に在籍していた時からやり取りを行い、卒業後についてもＡさんの行う援助活動に参加させてもらう等で関係を継続し、Ａさんのみならず、Ａさんと共に活動しているメンバーの方々とも交流を行った。

なお、通信課程で学ぶ学生の多くは、援助現場での勤務経験があり、養成校での学びを援助現場での実際と引き付けて理解できる場合もあるため、援助現場での勤務経験のないＡさんを選定した。

### （３）調査手法としてライフヒストリー法を用いる意義

本稿は、Ａさんの口述記録を基に、入学に至る背景と入学から卒業後までの事柄を取り上げてライフヒストリーを作成し、養成校での学びが実習や卒業後の援助実践からの影響を受けたことで、どのように変化したのかを分析する。

そのため、人生の経験を時間軸に沿って整理し、自己の発達や周辺環境との相互性を表現するライフヒストリー法は、本研究の目的を達成する上で有用であると考えたからである。

### （４）記述法

本稿で取り上げるライフヒストリーは、聞き取り調査で収集したＡさんの口述記録からの引用と引用部分への筆者の分析的注釈とを区別して記述する「分離式記述法」を用い、次のような構成としている。なお、「ｂ.」はインデントし、「ａ.」と「ｃ.」で口述内容を用いる場合は、カギ括弧でとじ、必要に応じて補足説明を行う場合は括弧内に表記し区別している。

**【文章構成】**

ａ．解説（文献や行政資料、Ａさんから聞き取った内容をもとにして、「ｂ.」に至る経緯や背景などの状況説明）

ｂ．Ａさんの口述

ｃ．分析的注釈（「ａ.」と「ｂ.」の内容をもとにした筆者による分析や注釈）

## ２．結　果

### （１）Ａさんのライフヒストリー【入学から卒業まで】

#### ①定年からのスタート　―福祉を学ぶことを決めた理由―

Ａさんは、高校卒業後４年制大学に進学し、その後、一般企業で勤務した。定年が近づく頃に妻が病気を患い、闘病生活を送ることになった。その中で、患者同士が情報交換を行い、励まし合う“セルフヘルプ活動”の必要性を強く感じることになった。この経験から、将来は福祉の活動に携わりたいという夢を持つようになり、60歳で定年を迎えて数年が経った後、福祉という新しい世界で学ぶことを決意した。そして、通信課程の養成校に入学をした。

私の妻が（アルミ缶をリサイクルして障害者支援施設に寄付するボランティア活動に）前からかかわっていたと。ほんで、私自身は、全然かかわらず､仕事ばっかりしてたんですけど。（自分が）仕事を辞める、退職する番になって、その前に、妻が、まぁ、病気で亡くなって、で、退職した後に、（妻がしていたボランティア活動を代わりに）やって欲しいって、依頼がありまして、私自身も、ずっと以前からは、ボランティアっていうか、福祉の活動っていうのは、あー、将来やりたいなっていう思いがあったんで、えー、一応、それを引き受けて、で、その活動をやりはじめた。（中略）
その時に、単純に、アルミ缶を集めて、そういうのをやってく活動だけでは終わりたくないなっていう思いがあって、もう少し、その、障害者支援、障害者の家族支援っていうのをもっと本格的に深く、こう、かかわることができたら良いなという思いがありました。で、そのために、自分自身も専門職と同様な知識と技術というのが必要で、そういうのを持って、そういうのの上に立って、まぁ、ボランティア活動とか、あるいは、一つの活動をやる必要があるなという思いがあって、で、社会福祉士の、まずは、福祉の勉強をするために、あの、どっか勉強できるとこないかなという思いがありました。

Ａさんは、定年退職後、妻の後を継いで、Ａさんが暮らす地域にいる障害者やその家族への支援活動に参加するようになった。その出会いを通じて、Ａさんは、中でも障害者を持つ家族が地域の中で孤立し、家族だからこそ抱えている悩みがあることを知った。そこで、障害者の家族を対象としたイベントの開催や、日ごろの悩みを語り合うことのできる場所（サロン活動）をつくりたいと思うようになった。

**②養成校での学友との出会いから学ぶ**

通信課程の養成校では、18歳以上から60歳以上までと幅広い年齢層の学生が在籍している。学生生活は、自宅学習の部分に比重が置かれながらも、学生同士や教員と対面する面接授業（スクーリング）も受講することになっている。スクーリングは､普段、自宅で一人教科書を読み、レポートなどの課題に取り組むことが多い学生にとって、他の学生との交流や教員からアドバイスを得られる機会となり、孤独感を解消していくきっかけとなる。

最初、養成校に通う前は、やっぱ他に（自分と同じ年代の人が）みえるんかなぁって思いながらも、まぁいいや、どうあったってやるんだからと思ってて。（入学してみると）結構、女性でも男性でも（いろいろな年齢層の人が）みえて、僕が、こう年取ってるとか違和感なく授業の中でも接してくれたんで。やっぱ、すごくそういう世界だなぁと思いましたよ。

通信課程の養成校は、さまざまな年齢層の学生が在籍することから世代を超えて語り合い、また、スクーリングでのかかわりを通して、いろいろな人の価値観や人生観にふれることができる。

Ａさんは「若い時に通っていた大学では、勉強を全くやりませんでした。（勉強をする）目的がなかった。でも、今回は目的がありましたから、勉強は相当やりました」と話す。そして、学友との交流の中から、いろいろな目的を持った人たちと出会い､「皆さん仕事を持ちながらとか。やっぱり、苦労を覚悟で来てみえるってところで。雰囲気や目の色が違う」ことを感じたと言う。

**③養成校で社会福祉士としての視点を学ぶ　―利用者本位とは―**

社会福祉士が身につけるべき「利用者本位」の視点は、1970年代に端緒があり、80年代から構想され、90年代を通じてその意味が明確化し、供給者本位から利用者本位へという理念に基づく社会福祉援助での基本となる考え方である。

社会福祉基礎構造改革以前の社会福祉は、国や地方自治体、社会福祉施設・地域相談機関（以下、施設・機関）などの供給者（援助者）側から、対象者（利用者）に向けて一方的に供給されるような枠組や内容を提示してきた。そのため、社会福祉の権限は、援助者側に委ねられ、利用者は、その決定に左右されるとともに、援助における客体的な存在として位置づけられていた。

しかし、利用者本位の視点では、今までのあり方

を見直し、利用者は、一人ひとりの具体的な生活歴とさまざまな諸条件のもとで生活する生活者であり、生活の主体者であるととらえている。一方、援助者は、利用者が地域で自立した生活を送ることを基本として、「利用者の自己決定・自己選択」を尊重し、個別的なニーズに対応しながらライフサイクルの全段階を通じ総合的に援助することが求められているのである。

Ａさんは、養成校で利用者本位の視点を学んだことで、これまでの自分自身の考え方が変わる経験をした。

> 専門的な部分ってので、大変勉強になりましたね。単純に福祉っていうのが、世話をするとか、介護するとか、ね、分からない人たちは、あの、世話をしてあげると、ね、そういう介護してあげるということでの福祉に対する考え方だと思うんですけど、そうじゃないことはよく分かりました。やっぱり、自己覚知ということで、自分自身の考え方とか、自分自身の価値観とかいうものを、きちっと見つめ直すなりを持って、えー、対人間にかかわらないといけないっていう、そういう部分だっていうのは、勉強の中でよく、非常に分かった部分ですね。（中略）（福祉に対する自分の）考え方や理念的なものが変わってきたと思う。やっぱり、利用者様中心という考え方、まぁ、そのへんはやっぱり、結構、たたき込まれたっていうか。

養成校での学びは、これまでのＡさん自身が持っていた福祉サービスの利用者は「～してあげる」存在であるという福祉に対する意識を転換させる契機となっている。

「自己覚知」は、これまでの自分の人生をふり返り、そこで形成されてきた自己の考え方や物事のとらえ方、対人関係の築き方の傾向等の価値観を把握することである。これは、社会福祉士としての専門的な知識や技術を習得するための準備として、また、専門職として職務に携わっていく過程においても、繰り返し行っていかなければならない。Ａさんは、自己覚知を行うことで自分自身の価値観を見つめ直し、利用者は客体的な存在ではなく、生活の主体者であるという考え方を新たに持つことができた。

**④養成校での学びを実習でとらえ直す**

養成校では、施設・機関で援助実践を行う実習という科目が設けられている。実習は、社会福祉制度やソーシャルワークの理論などの講義と、講義で得た知識を関連させて模擬的に実施していくという相談援助演習[2]（以下、演習）での学びをもとに、援助現場での実践を通して技術の習得を目指す課程である。

Ａさんは、障害者支援施設で実習を行い、「利用者本位」の視点で援助を実践する難しさを痛感することになった。

> そーですねー。職員の人が実際に毎日利用者さんに対して、いろんな世話をしたり、手を引いたり、あるいは、まぁ、パニックになった時に抑えたり、そういうことは具体的にあるんですけど、やっぱ、あの、その中には、利用者様本位、利用者様中心っていうのが、具体的にぱっと見えるかどうかっていったら、見えないかもしれないね。あのー、やっぱ何か、こう相談したり、職員の中で話し合ったり、まぁ、そういう場にもおらしてもらいましたけど、利用者様の、個別支援計画に対して話したり、何かそういう時に、やっぱ、そういうところが、あー、感じられた。それと、やっぱり、そういう話の中で、えー、実習指導者さんなんかが加わった話なんかだと、（中略）利用者様本位で考えるとっていう（問いかけがある）。職員たち（側）の目線で考えてるところを、利用者様本位で考えるとどうなんかなっていう。軌道修正って言葉が出たりするんですよ。まぁ、そういうので分かりましたよね。それから、（自分も）個別支援計画を立案する練習もさせていただいたんですけど、そこでは、（実習指導者に）駄目出しを何回かされて、そこもやっぱり、利用者様本位としていっていう。相当厳しく言われて。

Ａさんは、実習を通して「新しい発見」をたくさんすることになった。養成校での学びを援助現場で実践することに対して、「自分自身がどうやっていくか、そこに難しさがある」と、各々のすり合わせの困難さを述べる。

Ａさんは、利用者本位という視点は習って理解し

ていたような気がしていても、実際に援助現場に出てみると目の前の業務に精一杯となり、「つい自分の考え、自分の見方」で利用者を見てしまうことがあるという感覚を体験した。また、一方で、「自分の考え、自分の見方でやろうとしても、日常は過ぎていく」、「(利用者本位の) 視点を忘れても職務はできる」という援助現場の現実についても感じたと言う。

他にも、利用者本位の基本的な考え方である「利用者の自己決定・自己選択の尊重」についても、次のように話す。

> 自分自身の、あのー、見方とか考え方に、やっぱり、実習先でのことが、自分自身に取り入れられた、自分自身を修正したってのはありますね。利用者の人の見方で見なきゃいけない。例えば、言葉とか、表現が苦手な人でも、願いは持っている。あれが食べたい、あれは持っている、あれがいやだとか、願いは持っているのを、その願いが何かっていうのを、やっぱり、つかみ取る、ということの努力っていうのをそれは習って、やった。今までだと、何も表現しない、何も分らない（と思ってしまうことでも、実習では)、例えば、(障害を持っていて）そのへんウロウロしている子でも、その時、それ以外のとき、願いが見えると。ちらっと垣間見える、その子の願いとか思いを、やはり、感じ取らなきゃならないっていうのは、習いましたんで。

利用者の生活場面をとらえてみると、利用者の心身的な機能だけではなく、日々変化していく体調や気分などによって、常に決定できる状態にない場合がおとずれる。体の状態や感情によっては一時的に判断能力が弱くなったり、欠如したりすることもあり得、専門職には、その状況に臨機応変に対応していく柔軟性と、相手に付き合うことの忍耐力を持つことが必要とされる。

Ａさんは、「言葉とか表現とかそういうもので、何もできない、苦手な人が、どういう願いがどういう希望があって、その願いを叶えるために、相手の意思をくみ取ることができるような方法を工夫して提示する」こと、相手の意向が「分からないじゃなくて、垣間見なきゃ分からない」こと、「たまに見るんじゃなくて、その利用者の人と日ごろ付き合ってると、もう、そういうのをふと出すとき、そういうのをつかみ取るようになんなきゃいけない」ことを、援助現場に出て、利用者の存在を通して見出すことができた。

### （２）Ａさんのライフヒストリー【卒業後】

#### ①学生から社会福祉士へ　―障害者とその家族への支援と誰もが暮らしやすい地元をつくるための活動―

Ａさんは、社会福祉士資格を取得して養成校を卒業し、これまで行ってきた活動を社会福祉士としての知識や技術を持った上で展開するようになった。中学時代の同級生の力をかりて、養成校入学前より取り組んでいた障害者やその家族を対象とした「サロン活動」から範囲を広げ、特別支援学校等に案内を配布して参加者を募り、年3回、地域で障害者の支援に携わる専門家を講師に招いた「勉強会」を開催するようになった。

> 社会福祉士で、資格を持ってそういうものであるということが､そういう勉強会の基盤ですね。(資格を取得したことで）今までの基盤を上げたと思ってるんですよ。一地域住民のボランティアの人が、社会福祉士とかいう、ちょっと、資格を持って武器にして、あの今やっている活動を継続していく。ちょっと底を上げたっていうか、自分が活動していく時に、やはり、対象を、あるいは、関連するいろんな社会資源がありますけど、やはり、良きにつけ悪きにつけ対峙してかなきゃいけない。相互に影響し合ってるから。(中略)
>
> （社会資源と対峙する時に、周囲からの自分への認識が）一市民なのか、ちょっとこういうふうに武器を持ってるのか(によって違ってくる。活動をする中で）やっぱ、武器を使わなければいけないようなことが起きてくる。

Ａさんは、活動を続けていくことで、「手弁当だけども、もう少しやりやすいように」していきたいと感じるようになった。

Ａさんは、養成校や実習先で、援助の必要な人でも、「必要な時には援助を受けながらできる」よう

になることが自立であり、「車いすの人でも、障害のある人たちでも、参加できる」地域をつくっていくことが社会福祉士の役割であることを学んだ。だからこそ、入学前に抱いていた援助に対する考え方が変わり、援助現場で活かすことができる知識や技術を習得できたと言う。

そして、実際の援助活動の中で、以前は、「一市民」であったＡさんが、社会福祉士となることで、社会福祉協議会や行政などに協力を求め、「(他) ができないこととか、やってないこととか、やって問題になってること。やれてないことをやる」ために訴えていく際の「武器」を持つことの重要性を感じた。資格は相手を説得し、信頼を得るためのツールにもなり得ると言う。

**②援助現場に立つことでこそ分かってきたこと**
**―教科書には載っていない筋書き―**

Ａさんは、社会福祉士として援助現場に立ち、実際に援助に携わるからこそ分かってきたことがあると言う。援助現場では、養成校で学んできた援助方法や事例の展開通りにはいかないことに直面することも多い。

> (ドメスティック・バイオレンスの) 相談、悩みを打ち明けられた時に、(養成校の) 勉強で習って、教科書とかで習ってきた援助の仕方や筋道といった、いろんな事例があるんですけど、(結果的には) 筋道立てておさまっていく。(でも、) 実際にはそんなに甘くなくて、(利用者の) 精神的な葛藤とかいっぱいあって、で、いろんなおびえとか、怖さがあって、それで、思い切って、そういうの (配偶者暴力相談支援センター) に飛び込まなきゃいけないし、その人が緊急の保護を受けて、そういう現場から隔離された後が、精神的なPTSDとか、いろんな精神的な病気っていうか、病状が、非常に現れてきて、(次の展開が) 考えられなくて、まず、精神的なパニック的なものがおさまる、落ち着くまで、どんだけかかるか分からんけど。やっぱり、一人ひとりの人の性格とか家庭環境とか、一人ひとりがその事情とか長さとか、精神的な症状の出てくる出てき方とか違うし、それのおさまり方っていうか。現実の中で、自分に問われるとこなので。やっぱ、ちょっと教科書で習った筋道とか、筋書きとかが現実とは違ったことがいっぱいあることがよく分かりましたね。

養成校では、援助場面の事例を用いて面接時のロールプレイを行ったり、グループになり事例検討を行う演習がある。Ａさんは、養成校で多くの援助事例を読んで演習に取り組み、援助の場面を想定したシミュレーションを行ってきた。

しかし、教科書に載っている事例には文章で表す上での限界があり、援助を行うために重要となる“生の利用者”は存在しない。本来、援助者は、利用者とのかかわりから関係を形成し、関係を形成する過程において情報収集を行い、援助方針を検討していく。生の利用者に出会うことで初めて「一人ひとりの人の性格とか家庭環境とか、その事情」が現れるのであり、「教科書で習った筋道とか、筋書き」とは違ったことが起きてくるのである。

**③援助現場での経験を重ねて「個別性」を追求する**

一人ひとりの利用者は、生活する環境やこれまでの人生経験に基づき、独自性のある個人として支援されるという権利をもった存在である。利用者のそれぞれが、社会の中で固有の経験をし、自分が経験した過去の出来事を独自の観点からとらえ、固有のものとして体験している。今までの体験や経験に由来している今の性格や生活スタイルは、利用者が築いてきた個別のものとして形成される。

Ａさんは、援助現場で利用者と出会うことで、「個別性」を重視する援助の大切さと難しさをより感じることになった。Ａさんは、社会福祉士として利用者とどう関係し、援助としていかに反映させていくのだろうか。

> (障害を持っている子どもがいる) お母さん方って一つでくくるけども、それは障害者でもそうなんですけども、障害を持ってる人たちでも、一人ひとり全く全部違う。性格も違うし、考え方も違う。家庭環境も違うし、経済状況も違う。やっぱり、障害のことで問題が起きた時に、その家庭の環境だとか、考え方だとか、性格だとか、本人自体の思いだとか、願いだとか、今まで何か援助を受けてきた行政的な部分の今

までの経過だとか、そういうあらゆるものを見て、アセスメントをして、判断、見つめないと、なかなか難しい。これも、現実的に、お母さん方、保護者の人たちがこうで、保護者の一人ひとりも違うというのが分かりましたんで。お母さん方って(一つに)くくれないなって。(中略)
今後に、その当事者の人たち及びそのお母さん方一人ひとりにとって、どういうふうになっていくのかってのは教科書には載ってないですもんね。教科書には指導されてない、載ってない、勉強では教えてもらえない、現実的な一つの事例なんですよね。その事例が今後にどう広がるのかってのはなんかまだ未知なんで。それを、僕は無理に引っ張るんじゃなくて、成り行きのスピードと、成り行きの展開でやってこうと思ってます。

援助現場では、「教科書には指導されてない、載ってない、勉強では教えてもらえない」ような出来事が起きる。Aさんは、利用者の性格や生活スタイルは一人ひとり異なって多様であり、個別性は、利用者の存在を通して、利用者自身から教えられた。Aさんは、「その人を受け取る（ための）自分自身が（実際に利用者と出会うことで）大分変わった」のである。

その時、Aさんは、「一人ひとり全く全部違う」人たちを相手に「無理に引っ張るんじゃなくて」、相手のペースに合わせ共に歩んでいく存在としてかかわっていく。Aさん自身が、利用者一人ひとりと関係を築きながら、活動に参加する利用者を取り巻いている人びととの関係をも築き、広げていくサポートもしていくのである。

**④誰もが住み慣れた地元で生活できるようにするために**

Aさんは、自分が生まれ育った地域で活動することに、こだわりを持っていた。活動を行う中で、誰もが身近な地域で生活することができるようにするためには、個人ばかりでなく、社会に向けた働きかけを行うことが大切であると感じるようになった。

（自分が）生まれ育ったとこだし、この地域自体が好きなんで、自然があって周りの環境とか好きなんで、非常に愛着があります。やっぱり地元のところを、良くしていきたいと。その地域住民のために、一人ひとりのために、大多数のためというのじゃなくて、その中に住んでいるいろんな人のために、やっぱり、良く、住みやすいところにしていきたい、という思いがあって。(中略)
地元の中で、障害を持っている人たちとか、お母さん方が、普通に存在（する）感（じ）。別にこう隠れる必要もない、何も自分たちを卑下する必要もない、やっぱり、こう分かってもらえる、普通の存在（として）。当たり前の社会の中の構造とかいろんなものが、そういう人たち、車いすの重症の人たちでも出会える、自由に（生活）できる設備になってる。そういうような形にしていきたいと思ってます。

Aさんは、自分の「生まれ育った」地域に「愛着があり」、「地域住民のために、一人ひとりのために」地元を「住みやすいところにしていきたい」と話す。しかし、まだまだ、障害者やその家族は、自分たちは、普通ではないと感じ、地域の中で隠れながら生活を送っていると言う。サロン活動や勉強会への参加を呼びかけようとしても、悩みを抱えている人びとがどこにいるのかも分からず、社会福祉協議会に協力を求め、特別支援学校等にチラシを配ってまわった。そして、共に活動してくれる人たちを探し、ネットワークを築き、障害者やその家族が、普通に存在することができるような当たり前の地域をつくることを目指した。

**⑤これからの人生について　―さまざまな人びとの出会いとかかわりを通して―**

Aさんは、現在、サロン活動や勉強会を定期的に開催しながら、参加者を募り、地域での協力者を増やそうとしている。援助活動の一環として、地域の中に障害者が働くことができる場所をつくろうと、地域の人から店舗を提供してもらい、レストランの運営を始めた。そして、地域の人びとにお客様として来店してもらえるよう営業を続けている。しかし、このような活動への参加が定着する人もいれば、一度きりの人もいると言う。

Aさんは、「僕、せっかちなんで。どうしても、

お膳立て、ぱぱっと立てようとしちゃう」と活動を行う上での自分自身の性格について話す。その時、Ａさんの周囲にいる仲間が、「『Ａさん、まだまだ』」と声をかけてくれるため、「ゆっくりしなあかんなと思う」そうだ。そのやりとりをすることで、Ａさんは、「ほんで、良いんですよ」と、自分の性格を理解し受け入れ支えてくれる仲間がいることで、試行錯誤しながらも活動をつづけることができていると言う。

Ａさんは、自分の将来の夢について話す。

> そーですね、まぁ、死ぬまで、福祉のこういう世界の、こう援助者でありたいなと。それも、まぁ、援助者だけど、傍観者じゃなくて、あー、要するに、活動を共にするような援助者に。どうしても、当事者じゃないんで。援助者として共に活動すると。まぁ、同志でありたいなと。今のお母さん方とか、そういう子たちと、僕は同志の立場でできてったらいいなという思いがあります。ずーっと死ぬまで。

Ａさんは、よく周りの人から次のような質問を受ける。「『Ａさんは、別に子どもさんが障害持ってるわけじゃないし、どうして、支援とかされようと思ったの』」と。

Ａさんは、社会における反権力やマイノリティに対する人権について、20代の頃に通っていた大学での学生運動を見て意識をするようになった。当時のＡさんは、「はいどうぞってそこに参加するんじゃなくて、自分たちがやりたいことはつくってやろうかって」、グループをつくり行政に向けて働きかけを行った。Ａさんは、現在取り組んでいる障害者やその家族への支援活動は、これまでの自分の人生で培ってきた価値観と繋がるものがあると言う。

Ａさんは、64歳を迎えた。「人生の曲がり角をまだまだ曲がったばっかだと思ってますからね。これから残り半分を、これからやらなきゃいけないので」と笑顔で語った。

## ３．考　察

### （１）養成校での教育と援助現場で求められる実践力とのギャップを考える

Ａさんは、養成校で学び得た知識を持って援助現場に立った際、養成校で習った通りに実践できないことを痛感した。その要因としては、養成校では、理論に基づき形式に従った援助の展開を学ぶのに対して、援助現場ではかかわる人びとの反応によって、柔軟に形を変えながら対応する力が求められるからである。

「社会福祉が対象とするのは一人ひとりの人である。援助現場では、クライエント、支援者、さらには自分自身と向き合う営みを繰り返すことになる（筆者匿名，2016，pp.234）。」援助は、さまざまな価値観を持つ人びとがいる現場で行われ、社会福祉の対象は、個人、家族、小集団（グループ）、施設・機関または組織、地域等であり、それらを構成するものは、つきつめると、「一人ひとりの人」である。

養成校で学ぶ「利用者本位」や「個別性」の視点は、利用者一人ひとりの個別的な生活歴と生活における諸条件をふまえて利用者の主体性を尊重し援助するという考え方であり、利用者の生活で発生する多様な困難は、利用者個人のみならず、関係する人びととの出会いを通して初めて確認できるものである。

そのため、そのような現場に身を置くことができない学生にとって、多様な価値観を持つ人びとや複雑化している福祉課題を具体的にイメージすることが困難となり、かかわる人びとの反応から予測できない出来事が生じることに戸惑いを感じてしまうと考えられる。

### （２）今後の課題　―援助現場とのギャップを埋める養成校の教育内容とは―

養成校は、これからの教育を進めるにあたり、援助現場で活かすことができる実践力の習得を目指し、援助現場の状況を教育現場で伝えていくことができる場や人材の整備、実習における援助現場での経験を養成校で学ぶソーシャルワークの理論と照らし合わせて検証する実習指導及び実習後の授業内容の充実、学生が卒業し、就職先の援助現場で経験する現実をとらえ直し、その経験をもとに改めて養成校で学び直すことができるアフターフォロー体制等

が必要であると考える。

今後も、学生が養成校と援助現場を行き来しながら考えることを繰り返し、双方のギャップを埋めるための方策について検討していきたい。

## 引用文献

厚生労働省ホームページ　2016『社会福祉士のあり方について』：5　http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000145743.pdf

筆者匿名　2016「施設職員の一言コラム　福祉の道を進もうとするあなたへ」藤園秀信　打保由佳　川田誉音『社会福祉相談援助演習－ソーシャルワークの理論と実践をつなぐ－』みらい：234

## 注　釈

[1]2021年には、新たな教育カリキュラムの導入が予定されており、それに伴い科目名称が変更となる見込みである。

[2]同上

**謝　意**

本稿で取り上げたライフヒストリーは、Ａさんへの聞き取りと活動の記録を基に作成しております。Ａさん及びその活動に賛同し、力を尽くされた人びとに敬意を表し、調査にご協力いただきましたことに、心より感謝申し上げます。